

「五つのパンと二匹の魚(マタイ 14:17)」で数千人が満腹したという福音書の記述(14:21)。史実なのか、それとも何事かを象徴的に表現しているのか。

「ありがたいならイモムシやクジラ」とは、謝意に照れての江戸町人の地口だが、「蟻が鯛」サイズならさしずめ「芋虫は鯨」という意。なるほど群衆が蟻くらいなら少しのパンと魚で満腹できる。あるいは、この魚が鯨ならば大群衆でも腹一杯になるだろう、というようなことをつらつら思い描いた。いや、供給と享受の、そんな量的な事柄ではない。

今日、食料は有り余っている。が、なぜ餓死する人がいるのだろうか。早魃や戦禍の中にある人々のことではない。食べ物を大量廃棄しているこの日本で、人が餓死したり、幾日も空腹であることが、なぜ起こるのだろうか。

経済や労働の仕組み、福祉や自尊心の問題、と言えればそれぞれの答えではあろう。だがまだ、肝心な所が言い当てられていない、私も無関係ではない何かがあるんじゃないか。

少量のパンと魚で大群衆が満腹するキリストの奇跡と、食料が有り余っているのに空腹な者が多くいる私たちの現実、地続きの何かであるような気がする。であれば、イエスが群衆を満腹させた出来事は、象徴的な表現であるだけでなく、今日の「空腹」状態を解消させる道筋なのではないか。

弟子たちは常識的に、群衆の空腹を自己責任で解決させるよう進言した(14:15)。自分たちも腹減ったが、群衆は帰る気配がない。もうどうしようもなく、散会を求めた(14:15)。

イエスは弟子の不安を制するように「行かせることはない。あなたがたが彼らに食べる物を与えなさい(14:16)」と命じた。

集会を解散させないばかりか、大群衆の空腹まで「お前たちが何とかせい」とは、弟子の困惑が目に見え、浮かぶ。「そんなバカな」、弟子たちは「ここにはパン五つと魚二匹しかありません(4:17)」と声を荒げて答える。イエスは、パンと魚を持って来させ、群衆を草の上に坐らせた(14:18~19)。

イエスはパンと魚を取り、「天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて弟子たちにお渡しになった。弟子たちはそのパンを群衆に与えた(14:19)。「あなたがたが彼らに与えよ(14:16)」と命じた食べ物は、祈りと共に裂かれたイエスのパンであった。

弟子を介して、イエスのパンは一人ひとりに手渡され、「すべての人が満腹した。そして、残ったパン屑を集めると、十二の籠いっぱいになった(14:20)」。

群衆全体を見ておののくことはない。十二人の弟子それぞれが、目前の人々を満腹させられる恵みは渡されるのだから。その恵みを弟子自身が分かち、出会った人にほいと手渡すだけ。

真に満腹するパンは、金を出して買うものではない(14:15)。また自己責任や(14:15)自力で得るものでもない(14:17)。

最後の晩餐を思い起こす。「イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。〔取って食べなさい。これはわたしの体である〕(26:26)」。

弟子が受け、群衆に手渡すパンはイエスの体だ、命だ。条件なしに赦し、癒し、罪を贖う神の死。それで命が「満腹」する。

パン屑が一杯になった十二の籠(kophinos)はユダヤの枝編み籠。後の類似記述では(15:32~39)七つの籠(spuris)。これはギリシアの葦編み籠。七つとは世界。イエスの体が、世のすべてを満腹させる。



《おまけのひとこと》

畑を耕した時 張りきり 全体の広さに絶望した 隣畑の婆さんは止まっているかのごとき鋤捌き 次の日も止まって見え いつのまにか苗が整然と植えられている 足許を耕すことこそ希望なのだ